

障害児のきょうだいの心理的支援プログラムの効果

- ¹⁾ 鳥取大学大学院医学系研究科脳神経小児科部門 (主任 前垣義弘教授)
²⁾ 鳥取大学大学院医学系研究科臨床心理学講座
³⁾ 鳥取大学医学部脳神経小児科

井上菜穂¹⁾, 井上雅彦²⁾, 前垣義弘³⁾

Effects of support program for siblings of children with developmental disabilities.

Naho INOUE¹⁾, Masahiko INOUE²⁾, Yoshihiro MAEGAKI³⁾

- ¹⁾ *Doctoral Course, Graduate School of Medical Science, Tottori University, Yonago 683-8503, Japan*
²⁾ *Department of Clinical Psychology, Graduate School of Medical Science, Tottori University, Yonago 683-8503, Japan*
³⁾ *Division of Child Neurology, Department of Brain and Neurosciences, Faculty of Medicine, Tottori University, Yonago 683-8503, Japan*

ABSTRACT

This study investigated the effect of the support program to siblings with developmental disabilities. The 15 siblings from 6 years old to 12 years old participated in this program. This program was built by reference in 'sibshop (Meyer&Vadasy, 1994)'. The program was consisted of 5 sessions, including 'recreational and food activities' and 'discussion and peer support activities'. The each session was about 4 hours. In the recreational and food activities, it carried out for the purpose of making a friend, and consisted of activity which promotes the positive communication between siblings.

In the recreational and food activities, activity which siblings analyzed about themselves, the activity which studies the ways of coping about the trouble which may arise in everyday life, and the activity it is heard that the talk from a specialist and siblings on grown-up.

The results indicated that siblings' attitudes and consciousness were improved, in addition to their mothers' anxieties were decreased. We discussed about the importance of this program as preventive approach of psychological problems of the siblings. (Accepted on June 18, 2014)

Key words : siblings with developmental disabilities, support program, preventive approach

はじめに

障害児（以下「同胞」とする）の兄弟姉妹（以下「きょうだい」とする）には特有の悩みが存在し、健常児のきょうだいと比較して、高いストレスをもつことを指摘した研究が多くなされてきた。例えばきょうだいは障害の不理解から同胞の障害を過剰に自分に置き換えたり、罪悪感を覚えたりする場合があることが示唆されている¹⁾。またSeligman²⁾は家族内で障害について話し合うことが出来ない場合には、きょうだいは悩みや疑問が解決されないまま孤独な立場へ追いやられる危険性があることを指摘している。

事例研究においては、羽場ら³⁾は、心身症を発症した慢性疾患児のきょうだいの事例を4事例報告している。きょうだいが心身症を発症した要因として、母親が同胞に手がかかってしまうため、「いい子」でいたために自己主張できなかったこと、母親の代わりに同胞の介護的な役割までを引き受けて負担が増えすぎてしまったことなどを指摘した。また柄澤⁴⁾は、学習障害児の兄をもつ妹が不登校になった事例を報告している。妹が不登校になった理由として、母親は兄の対応のみに追われ、父親は子どものすべての対応から手を引き、その結果家庭内での妹の孤独感が深まってしまったことが考察されている。

このようにきょうだいについては様々なストレスの存在が指摘されてきたが、これらはきょうだいの各年齢段階において発達的に変化していくことが示されている^{5,7)}。例えば幼少期は母親が同胞中心の生活になってしまうことや自分も同胞中心の生活になってしまうことに対する不満から生じるストレスが報告されている。成人のきょうだいについては親亡きあとの問題について大きな不安を感じ、親との意見の相違や対立についても指摘されている⁵⁾。

きょうだいの心理研究においてはストレスや悩みについての研究が多くみられるが、一方で障害児がいることで肯定的な影響を受けていることを示している報告もある⁶⁾。例えばきょうだいの役割について出生順位の逆転が見られる場合、きょうだいは年齢以上に精神的に成熟し⁹⁾、また強い責任感をもつ場合もある。また、きょうだいは援助専門職につくことが多いことなども、多くの研究者によって示唆されている¹⁾。橘・島田¹⁰⁾も障

害児を同胞にもつきょうだいはもたないきょうだいに比べ、同胞を「大切な人」と位置づけ、「長所を見つけたい」と積極的にプラスに考える傾向のあることを指摘した。このように障害児をきょうだいにもつことは否定的な側面ばかりではなく、多くの肯定的な側面をもつことも指摘されてきており、きょうだいの心理的成長を支援していくためにはこれらの肯定的な側面をのばしていくような環境を整えていくアプローチが必要であると考えられる。

米国では1960年代にきょうだいに対する支援として、障害や疾患に関する情報の提供、同胞同士グループディスカッション、親との親密な会話、レスパイトケアなど家族外援助の利用が有効なことが示された¹¹⁾。そしてその中の支援活動の一つとして「特別なニーズのある子どもの同胞に対する支援事業 (Sibling Support Project : SSP)」が実施されてきている。

Meyerら¹¹⁾は、8～13歳の子どもに対してシブショップ (Sibshop) という心理的支援プログラムをおこなっている。シブショップではきょうだいに対してさまざまな活動やピアサポートの場を提供している。現在では子ども病院や地域で家族支援に関わる機関が実施している。Meyerらはシブショップの目的として、①楽しい雰囲気の中で同じ立場のきょうだいと出会う ②同じ立場のきょうだいと共通の喜びや悩みについて話し合う ③きょうだいが普通に経験する状況に他のきょうだいはどのように対処しているのかを知る ④きょうだいの特別なニーズをもつ意味について学ぶ機会を提供する ⑤特有の悩みや得がたい経験について親や専門家が学ぶ機会を提供する、の5点をあげている。

これに対しわが国では、今までは親の会の活動の一部として不定期にきょうだい活動が運営されてきたケースが主であった。研究機関での実践として、平川は自閉症児の本人支援の会と並行して、1980年代以降長期的にきょうだい会を継続して運営している。平川ら¹²⁾によると、参加することにより知識の増加がみられたり、きょうだいの心理的負担が軽くなることが報告されている。

本研究ではMeyerらのシブショップのプログラムを参考にして、日本向けに改良し、障害児のきょうだい一人一人の実態やニーズに合わせた活動を提供できる心理的支援プログラムを短期間のプロ

グラムとして開発する。またきょうだいの心理面および行動面に対する効果、きょうだい支援の短期プログラムの効果について分析し、検討することを目的とする。

対象および方法

1. 対象

きょうだいは障害児をきょうだいにもつ6歳(小学1年生)～13歳(中学1年生)の子ども16名(男8名,女8名)であった。障害種の内訳は知的障害をともなう自閉症7名,知的障害5名,高機能自閉症1名,ダンディーウォーカー症候群1名,アンジェルマン症候群1名,ビタミンK欠乏症による脳内出血による後遺症1名で,同胞よりも年上のきょうだいは5名,年下のきょうだいは11名であった。

募集のちらしは内容をやさしいことばで記載し,親の意思だけでなくきょうだい児の意思で参加決定できるよう工夫した。地域の学校教師の勉強会,定期的にA大学附属センターの療育相談に参加している親に配布すると同時に,インターネットのホームページに掲載して募集をおこなった。同胞の障害種が混合していても共通点が多く自分の家族に対する洞察力が高まる(Meyer et al, 1994)との報告があることから,今回のプログラムでは同胞の障害種は特定せずに募集をおこなった。

2. 手続き

1) 支援プログラムの実施

X年7月から10月の期間に全5回のきょうだい支援プログラムを実施した。プログラムはMeyer et al (1994)のシブショップのプログラムを参考に,体を動かす遊び,落ち着いた遊び,話し合いの活動を交互に組んで作成した。各回のプログラムの詳細を表1に示した。遊びの活動ではレクリエーションにグループカウンセリングの理論を応用したコミュニケーションゲームを積極的に取り入れた。

話し合いの活動は自分の同胞のことについて考え,同じ立場にある他のきょうだいたちの体験を知る機会になることや,ピアサポートの場になることを目的とし,自分のことやきょうだいのことを考える活動をおこなった。内容は1.自分ときょうだいの得意なところ,不得意なところをみつけだし,共にその両方もちあわせていることを考えていく活動(長所と短所①②,わたしの夢・きょう

うだいの夢),2.普段周囲の人に言えない気持ちを出しあい,他の人の考えについて知る活動(言いたいこと①②③),3.きょうだいが日常生活場面で遭遇するかもしれない困難な状況(例えば「同胞が自分の宿題を破ってしまった」など)を人形劇で再現してその体験の有無や気持ちについて話し合い,その対処法を仲間で考え実際にロールプレイを実施する活動(みんなへの手紙①②,人形劇①②),4.同胞の障害についての学習活動(紙芝居),5.障害をもつ同胞のいる大人のきょうだいの体験談を聞く活動(きょうだいのお話),などであった。低年齢のきょうだいにわかりやすく,動機付けをあげるために,話し合いの活動では人形劇を取り入れるなどの工夫をおこなった。

毎回のプログラム終了後,親に対してその日の活動の様子について記載した手紙を郵送かFAXにより個別的にフィードバックをおこなった。

2) スタッフ

きょうだいプログラムは1名のスタッフがファシリテータとして進行し,1名のスタッフが親の会の進行をおこなった。残りのスタッフで担当児の割り振りをおこない(以下,担当スタッフ),各きょうだいへのフォローをおこなった。

3) プログラムの評価

1. きょうだいに対して

きょうだいに対しては,質問紙調査と行動変化によって評価をおこなった。

質問紙調査はMcHale et al (1986)が作成したものをベースにし,三原(1998)を参考に小学生にも分かりやすい表現に改変したものを作成,プログラム前後に実施をおこなった。評価は5件法であった。

行動変化は各回ともビデオ記録をもとに,エピソードデータとして抽出し記録した。その際,活動への参加の意欲,発言回数や発言内容,仲間とのかかわりを中心に記録していった。

2. 親に対して

親に対してはプログラム前後と各回終了後に自由記述形式の質問紙調査をおこなった。自由記述の質問内容は母親を対象とした調査研究(玉井・小野,1992など)を参考に作成した。

プログラム前の質問紙は,現在のきょうだい関係,きょうだいが障害を意識した時期や様子,親のきょうだいに対する思いなど14項目であった。プログラム終了後の内容はプログラムに参加させ

表1 各回のプログラム

第1回目	第4回目
10:00 似顔絵名札	10:15 ストレッチウエーブ
10:30 キャッチ	10:20 ぎゅうたんゲーム
10:40 進化ジャンケン	10:35 人間ビンゴ
10:55 ネームトス	10:55 みんなならどうする? (人形劇②)
11:10 さがしてみよう (長所と短所①)	11:30 自由時間
11:30 サムライ	11:45 昼食 (カレー・サラダ)
11:40 昼食 (カスクート)	13:00 はんかちおとし
12:40 風船リレー	13:15 言いたいこと②
12:50 みんなへの手紙①	13:45 ピラミッドじゃんけん
14:00 次回の相談	14:00 次回の相談
第2回目 (キャンプ1日目)	第5回目
10:15 背中合わせたち	10:15 交差拍手
10:25 仲間探し	10:20 人と人
10:45 名前あて	10:35 言いたいこと③
11:10 さがしてみよう (長所と短所②)	11:00 ウルトラマンじゃんけん
11:30 インパルス	11:40 震源地
11:45 スピードラビット	12:00 昼食 (お弁当)
12:00 昼食 (お弁当)	13:00 連絡先の記入
13:10 数字消し	13:20 きょうだいのお話
13:40 わたしの夢①	13:40 連絡先の交換
14:00 テーマ別ビンゴ	14:00 手紙の進呈
14:30 みんなへの手紙②	
15:00 すいか割り	
15:30 クラフト	
17:00 バーベキュー	
19:30 キャンプファイヤー, 花火	
21:00 お風呂, 就寝	
第3回目 (キャンプ2日目)	
8:00 起床	
8:45 朝食	
9:30 スピードラビット	
9:45 きょうだいの夢②	
10:15 専門家の話	
10:45 日隠し彫刻	
11:15 みんなならどうする? (人形劇①)	
11:45 流しそうめん	
13:15 風船バレー	
13:10 言いたいこと①	
14:00 次回の相談	

た感想、シブシヨップから帰った後の子どもの様子、親からみたプログラム後の子どもの変化の有無と具体的な変化、きょうだい関係の変化など8項目をたずねた。

各回終了後に子どもの変化をスタッフにフィードバックしてもらうことを親に求めた。さらに各きょうだいの活動の様子をビデオ記録し、プログラム実施中の行動変化を記録し、きょうだいの心理面や行動面の変化について評価した。

結 果

1. きょうだいへの効果

1) 事前・事後の評価の変化

事前・事後評価の各項目における平均得点の変化を表2に示した。事前・事後の比較において、「ときどききょうだいが私の邪魔をすると腹がたつ」「きょうだいの分も私が勉強をがんばらないといけないと思う」の2項目が1%水準で有意に減少し、「私はきょうだいのことについての心配を誰かに相談できればよいのと思う」の1項目が1%水準で有意に増加した。5%水準で有意差が認められたのは20項目中17項目であった。1%水準、5%水準で有意差が認められた20項目のうち、その変化が肯定的な方向に変化したのは15項目であった。質問紙の分析結果から話し合い活動で取り上げたテーマに関連する項目(6, 8, 9, 10, 12, 16, 17, 22, 29)が改善することが示された。男女間での差はみられなかった。

2) プログラム実施中のきょうだいの行動変化

(1) 遊びの活動における行動変化

初回はスタッフが中に入らないと遊ばず、参加児だけの自発的な会話があまりみられなかったが、2回目(キャンプ1日目)の途中から自由時間に参加児だけで遊ぶ光景が見られるようになるなど、回を重ねるにつれ自発的に友達に話しかける回数が増えていった。4回目には数人の参加児から自分たちだけで自由に遊べる時間を作ってほしいという希望も出され、自分たちで考えた遊びをおこなう場面もみられた。また初めは遊びをしている途中でもスタッフの側へきて「うちの弟はね…」などと唐突に障害のある同胞について話した参加児も数名みられたが、回を重ねるごとに参加児同士の間で同胞の話をするようになっていった。遊びの活動では勝敗のつく遊びをおこなう場合は参加児の年齢が均等になるようにグループわ

けを考えることで、年長の子どもが年下の子どもの面倒をみたり引っぱっていったりと、参加児同士の中で自然と助け合いの行動が多くみられるようになった。

(2) 話し合い活動における行動変化

話し合い活動においては提示した問題場面の状況理解を容易にするために、人形劇や紙芝居など視覚的な手がかりを多く導入し、子どもの興味を持続させるための工夫をおこなった結果、話し合いの活動を「人形劇の時間」と楽しみな活動の時間ととらえる参加児も多かった。初めは恥ずかしがってあまり発言しなかった参加児も回を重ねるごとに徐々に自分のことを発言する回数が増えていった。また他児が発言する内容に「自分も同じことがあった」と話す場面も多くみられるようになった。遊びの活動中は参加児の年齢によって特に大きな違いはみられなかったが、話し合い活動は参加回数が4回未満と4回以上との場合で発言回数の違いがみられ、さらに3年生～4年生の中学年の参加児が発言する回数が目立って多くみられた。同胞との年齢差においては特に大きな差はみられなかった。

3) 家庭での参加児の行動変化

各回終了後におこなった親への質問紙の結果から、多くの参加児が初回時には「楽しかった」とだけ語り、内容については話をしない児が多かったが、回を重ねるごとに遊びの活動について具体的な内容を親に話すようになっていった。しかし話し合い活動については回を重ねても参加児の方から親に話す児はおらず、内容を親からたずねられても答えようとしない児が多かった。

親への質問紙の結果から「話し合い活動で取り上げた場面と似たような出来事が実際におこったときに、その経験を参考にして対応していた」という報告や、「障害のある同胞の世話を自分からすすんで積極的に取り組むようになった」という報告が見られた。さらに今までは同胞の障害について親に話をしたことのなかった参加児が、今回のプログラムをきっかけに話をするようになったという報告もみられた。

考 察

本研究はMeyerらのシブシヨップのプログラムを参考に独自のプログラムを加えてきょうだいの心理的支援プログラムを日本むけに開発・実施

表2 プログラム事前事後におけるきょうだいへの質問紙調査の結果

質問項目	平均値(SD)				
	Pre	post	t 値	自由度	有意確率
1 今日ここにくるのを楽しみにしていた	4.31(0.95)	3.77(0.73)	1.72	12	0.110
2 私は友だちのいいところをいっぱいさがそうと思っている	4.15(0.80)	3.38(0.65)	3.33	12	0.006*
3 みんなにやさしくしようと思っている	4.38(0.77)	4.31(0.63)	0.37	12	0.721
4 私は毎日元気にすごせてうれしい	4.54(0.78)	4.00(0.82)	2.50	12	0.028*
5 きょうだいを悪く言う人がいると説明しようと思う	3.69(1.25)	3.38(1.45)	1.17	12	0.264
6 きょうだいとかわってあげたいと思う	3.62(1.12)	2.62(1.26)	2.36	12	0.036*
7 きょうだいがからかわれていたら守ってあげる	4.08(1.26)	3.38(1.39)	2.42	12	0.032*
8 ときどききょうだいが私のじゃまをすると腹が立つ	4.38(1.04)	2.85(1.28)	6.33	12	0.000*
9 私は学校でいやなことがあってもお父さんやお母さんには話さない	3.62(1.12)	2.69(1.38)	2.41	12	0.033*
10 家族全員できょうだいを大切にしようと思う	4.31(0.85)	3.54(1.05)	2.74	12	0.018*
11 私はお父さん・お母さんのためにもいい子でいようと思う	4.08(1.19)	3.92(1.19)	0.35	12	0.730
12 きょうだいのぶんも、私が勉強をがんばらないといけなと思う	4.15(0.80)	2.77(1.24)	5.20	12	0.000*
13 きょうだいのことを周りの人に知られたくない	3.00(1.35)	3.15(1.14)	-0.38	12	0.711
14 家族の中で「障害」について話し合うことはない	2.69(1.38)	2.77(1.17)	-0.16	12	0.877
15 きょうだいのできないことを私ができると悲しい気持ちになる	3.15(1.28)	3.31(1.03)	-0.62	12	0.549
16 きょうだいが「障害」をもっているのは私が悪いのだと思う	2.92(1.12)	2.15(1.07)	3.00	12	0.011*
17 私は困ったときになんでも話せるひとがない	3.15(1.07)	2.31(0.95)	2.27	12	0.043*
18 きょうだいばかりかわいがられてうらやましい	3.00(1.68)	3.00(1.63)	0.00	12	1.000
19 私はきょうだいがいつまでも「障害」をもっているのではないかと心配に思うことがある	3.69(1.25)	3.77(1.09)	-0.16	12	0.877
20 きょうだいがいることでほかの家とはちがった経験をしていると思う	3.85(1.14)	3.08(0.95)	2.54	12	0.026*
21 私もきょうだいと同じ「障害」をもつのではないかと怖くなることもある	2.85(1.28)	2.23(0.93)	2.89	12	0.014*
22 お父さんとお母さんは私のことをかわいいと思っていないのではないかと心配になる	2.92(1.12)	2.23(1.30)	2.42	12	0.032*
23 私はきょうだいのことについての心配を誰かに相談できればよいのと思う	2.77(0.93)	4.08(1.04)	-4.00	12	0.002*
24 他の家族と自分の家族を比べることがある	3.31(1.55)	1.77(1.09)	5.28	12	0.000*
25 友だちがきょうだいのことを悪く言っているのを聞くとつらい	4.00(1.15)	3.54(1.27)	1.07	12	0.307
26 みんなはきょうだいのことを私に話さないようにしていると思う	2.46(1.45)	2.77(1.24)	-0.59	12	0.568
27 友だちのいいところも悪いところも見ようと思う	4.46(0.66)	3.31(1.03)	3.10	12	0.009*
28 私の家族にきょうだいがいてよかったと思う	4.00(1.22)	4.08(0.86)	-0.32	12	0.753
29 私はきょうだいが「障害」をもっていることを人に言いたくないときがある	4.00(1.29)	3.15(1.14)	2.67	12	0.020*
30 きょうだいがいるから私はしっかりしないといけないと思う	4.08(1.19)	3.46(1.13)	2.89	12	0.014*
31 きょうだいと一緒にでかけるのはいやだ	2.46(1.51)	2.69(1.38)	-0.45	12	0.658
32 きょうだいのぶんも私がしっかりしようと思う	4.38(0.87)	3.69(1.44)	2.64	12	0.022*
33 お父さんとお母さんはきょうだいにかかるのと同じ時間を私にはかけてくれない	2.54(1.27)	2.46(0.97)	0.30	12	0.776
34 ときどききょうだいがどこかに行ったらいいのと思うことがある	2.31(1.65)	2.62(1.19)	-0.89	12	0.392
35 きょうだいのできないことは私もわざとできないふりをすることがある	2.00(1.15)	1.92(1.04)	0.19	12	0.851
36 もっと家でお父さんやお母さんと一緒にいろいろしゃべりたい	3.38(1.50)	3.85(1.21)	-1.00	12	0.337
37 お父さんとお母さんは私よりもきょうだいばかりをかわいがる	2.85(1.41)	3.00(1.22)	-0.62	12	0.549
38 友だちのいやなところをがまんできる	3.31(1.32)	3.38(0.96)	-0.23	12	0.819
39 お父さん・お母さんが年をとったらきょうだいはどうなるかと心配になることがある	4.08(1.19)	3.38(1.12)	2.42	12	0.032

*P<.01

し、きょうだいの変化について分析した。その結果、肯定的な変化がみられプログラムの効果が示された。

1. 参加児への効果について

本プログラムの進行に伴い、自発的な遊びの要求や仲間との関わりが増加していったこと、各回後に参加児が家で話す友達の名前が増えていったという親からの報告がみられたこと、最終回におこなった連絡先の交換の際に「また遊ぼうね」と約束している参加児が複数いたことなどから、本プログラムは「仲間づくり」という大きな目的を果たしたといえる。

本研究においては、参加児の質問紙の分析結果から39項目のうち15項目に統計的に有意な望ましい方向への変化が認められた。本研究は平川らの先行研究とは異なり、参加者をきょうだい児のみに限定し、障害についての理解やストレス場面への対処などを学ぶ話し合いの場を多く設定した。その結果、普段親や同胞に対して抱えているけれども言えない感情（プラス面もマイナス面も）を共感したり表出したりすることができ、ストレスの軽減に影響を与えたと考えられる。例えば「私は同胞のことについての心配を誰かに相談できればよいのにと思う」という項目得点が有意に上昇していることは、本プログラムで他の参加児のことを知り、ストレスに積極的に立ち向かう姿勢がみられるようになったことを示しているといえる。また本プログラムで同じ立場の仲間と知りあったことで、自分と同じ悩みをもつきょうだいが他にも多くいることを知り、そのような仲間に悩みや不安を相談していきたいと感じるようになったとも考えられる。きょうだいと同胞との関わりや関係については、例えば「障害をもった同胞が自分の邪魔をすると腹が立つ」という項目の得点が有意に低下したことがあげられる。これは第3回目、4回目でもとりあげた話し合い活動（人形劇）によって、他の参加児のさまざまな経験や対応を知った結果とも考えられる。質問紙の分析結果からも話し合い活動で取り上げたテーマに関連する項目（6, 8, 9, 10, 12, 16, 17, 22, 29）が有意に減少することが示されており、話し合い活動で取り上げる内容が大きく影響していると考えられる。

石原ら¹³⁾はプログラムの参加回数はプログラムの効果にほとんど影響を与えていないと述べてい

る。しかし今回のプログラムでは全5回のプログラムを実施したが、4回以上の参加児と4回未満の参加児とでは話し合い活動で発言回数に違いがみられた。このことから、プログラムを構成する際にも4回以上で構成をすることが必要であると考えられる。

2. 参加児と親の意識差について

親の質問紙調査と参加児の発言内容から、両者の意識差がみとめられた。特に中学年の参加児については、親が参加児はまだ障害について気づいていないと思っている場合でも、児は親が考えている以上に同胞の障害について考えていたことが明らかになった。またきょうだいはそのことを親に聞くことができず、障害について知ることができないために様々な心配をめぐらせていた児もいた。

話し合い活動の中では、「これはお母さんには言わないで」と念を押したうえで今までにあった出来事や感情を記述する参加児も見られた。特に同胞についての感情（プラス面もマイナス面も両方）や親に対する不満などは親には知られたいくない様子であった。そのような様子は親が「同胞の障害についてはまだ何もわかっていないと思う」と記述していた家庭の参加児に多くみられ、今までに家庭内で障害について話す機会が極端に少なく、障害についての話をするのはタブーであると参加児がとらえていた可能性が推測できる。このことから普段から障害や同胞のことについてきょうだいが親に話をしたいと思ったときには気軽に話せるような雰囲気や、話ができる外部の仲間の存在が重要であると考えられる。

3. 今後の課題

本研究では同胞の障害種を限定せずにさまざまな障害種のきょうだいを集めておこなった。先行研究からは障害の種類については肢体不自由児・重複障害児・ダウン症・口蓋裂・糖尿病・自閉症・言語障害・脳性麻痺などにおいてはきょうだいの心理的適応にあまり影響しないという報告がある^{14,15)}。しかしまた一方では、障害の種類によるきょうだいの心理的影響については今後さらなる調査が必要という意見もある¹⁶⁾。本研究の話し合い活動では自分の同胞の障害のみでなく、他の障害の同胞をもつきょうだいの意見も聞く機会が設定された。例えば「障害児を同胞にもつ大学生のきょうだいの話を聞くプログラム」では、知的

障害の同胞をもつ先輩きょうだいの体験談が話された。この活動においては、異なる障害種の同胞をもつきょうだいも真剣に話に聞き入っており、共感的態度が多く観察された。しかしながら親からのアンケートにおいては、「自分の同胞の方が他児の同胞より大変だ」と感じたり、逆に「自分の同胞は他児の同胞より大変ではない」と感じたりする参加児がみられたり、他のきょうだいの障害特徴を理解できない参加児がいたことも明らかになった。このことから共感的態度に関しては障害種が異なっても影響はないが、障害理解の促進に関しては特に低年齢のきょうだいに個別的な配慮が必要であることが示唆された。

今回のプログラムを実施するにあたってはファシリテータの役割が重要であった。ファシリテータはきょうだいの心理についての理解と共に、自分の考えや価値観を押し付けるのではなく、相手の立場や考えに共感したり傾聴できるカウンセリングなどの知識や技術をもっていることが望ましいと思われる。そのためには森ら¹⁷⁾のようなスタッフの教育プログラムの充実やファシリテータの養成プログラムについても検討していくことが望まれる。

きょうだいへの支援は障害者の自立支援に関する政策的な変革の中、今後ますます注目されていくと考えられる。きょうだいを対象にした心理臨床的プログラムとしては、本研究のような予防的集団的な介入の他に治療的個別的な介入がある。治療的個別的な介入では主に症状の改善を目的とし、子どもに対してはプレイセラピー・大人にはカウンセリングなどを導入し、成果をあげている¹⁸⁾。これらのことからきょうだいが問題をもつ以前に実施される予防的心理療法としてのきょうだい支援プログラムと、何らかの問題が生じてしまったからのカウンセリングやプレイセラピーなどの治療的心理療法を総合的に含んだ支援システムの構築が必要であると考えられる。

結 語

本研究では障害児を同胞にもつきょうだいに対する短期の支援プログラムを作成、実施し、その効果について検討した。その結果、参加児の同胞に対する意識や接するときの態度が改善し、あわせて両親の不安が減少することが明らかになった。

文 献

- 1) Grossman FK. Brother and Sister of Retarded Children. : An Exploratory Study. Syracuse University Press, New York 1972.
- 2) Seligman M. Sources of psychological disturbance among siblings of handicapped children. Personnel-and-Guidance-Journal 1983; 61 (9), 529-531.
- 3) 羽場敏文・村上良子・阿部治郎・天野晴美・柏木宏介. 心身症を発症した慢性疾患児の同胞4例の検討. 小児保健研究 1993; 52 (6), 609-611.
- 4) 柄澤弘幸. 学習障害児の同胞に出現した不登校状態とその改善について. 小児の精神と神経, 1997; 37 (2), 145-151.
- 5) 松岡瑞幸, 井上雅彦. 発達障害児のきょうだいにおける心理的成長過程に関する研究. 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集 2001, 315.
- 6) 松岡瑞幸・井上雅彦. 発達障害児のきょうだいの心理的成長過程における母親との意識のズレに関する研究. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 2002.
- 7) 小田憲子, 井上雅彦, 松岡瑞幸. 自閉症児・者のきょうだいにおける心理的成長過程に関する研究 (1) - きょうだいの障害理解や悩みを中心に -. 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集 2003; 545.
- 8) Lobato DJ. Brothers, sisters, and special needs : Information and developmental disabilities. Baltimore : Paul H. Brookes Publishing Co 1990.
- 9) Simeonssen R, Mchale S. Review: Research on handicapped children ; Sibling relationships. Child:Care,Health and Development 1981; 7, 153-171.
- 10) 橘英彌・島田有規. 障害児のきょうだいに関する一考察 - 障害をもったきょうだいの存在を中心に -. 和歌山大学教育学部紀要 教育科学 1998; 48, 15-30.
- 11) Meyer DJ, Vadasy PF. Sibshops : workshops for siblings of children with special needs. Brookes, Baltimore 1994.

- 12) 平川忠敏. 自閉症のきょうだい教室, 児童青年精神医学とその近接領域 2004; **45** (4), 372-379.
- 13) 石原千佳子, 渡邊聡, 平川忠敏. 障害児のきょうだいに関する研究－介入プログラムについての実証的検証－九州・山口地区自閉症研究協議会発表資料 2002.
- 14) Breslau N, Weitzman M, and Messenger K. Psychologic functioning of siblings of disabled children. *Pediatrics* 1981; **67**, 344-353.
- 15) Lobato DJ. Siblings of handicapped Children : A review. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 1983; **20** (4), 545-553.
- 16) 三原博光. 障害者ときょうだい－日本・ドイツの比較調査を通して－学苑社 2000.
- 17) 森司朗, 平川忠敏, 古賀靖之. コミュニティー心理学と自閉症児治療教育(17)－ボランティア学生への教育プログラム－. 鹿児島大学文科報告第1分冊 1994; **30**, 87-96.
- 18) 茂木千明. 自閉症児のきょうだいと家族 心理劇的ロールプレイングの観点から見たきょうだいケアの事例 心理臨床学研究 2002; **20** (3), 252-264.